

2023年10月8日(日)礼拝メッセージ

聖書箇所:エレミヤ書 25 章 1~14 節(エレミヤ書講解説教 47 回目)

タイトル:「70年の終わりに」

エレミヤ書 25 章に入ります。今日は 1~14 節から「70年の終わりに」というタイトルでお話します。このことばは 14 節から取りました。「七十年の終わりに、わたしはバビロンの王とその民を——【主】のことば——またカルデア人の地を、彼らの咎のゆえに罰し、これを永遠に荒れ果てた地とする。」

ユダの民は、主のことばに聞き従わなかったのでバビロンの王に七十年間仕えることとなります。しかし、その七十年の終わりに、主はそのバビロンを滅ぼし、これを永遠に荒れ果てた地とします。そして代わりに世界を治めたペルシャによって、彼らは主のことばのとおり、約束の地に帰還することになるのです。それは期間限定の捕囚、期間限定の神のさばきでした。その 70 年の終わりに、主はご自身の約束のとおり、彼らを元の場所に帰させます。確かに苦難、困難があるでしょう。でも、その先をしっかりと見ている人は幸いです。国の滅亡のかなたに希望がある、回復があるということを見つめている人は、どんな苦難に遭っても強く信仰に立ち続けることができます。今日は、そのことを考えながら、この箇所を読んでいきましょう。

I. しきりに語りかけたのに(1-7)

まず、1~7 節をご覧ください。1 節には「ユダの王、ヨシヤの子エホヤキムの第四年、バビロンの王ネブカドネツアルの元年に、ユダの民全体についてエレミヤにあったみことば。」とあります。

ユダの王、ヨシヤの子エホヤキムの第四年とは、B.C.605 年のことです。この年に、ネブカドネツアルがバビロンの王に即位しました。その元年に、主がエレミヤを通して、ユダとエルサレムの民全体に語られたことばがこれです。24:1 には、「バビロンの王ネブカドネツアルが、ユダの王、エホヤキムの子エコンヤと、ユダの高官たち、職人、鍛冶をエルサレムから捕え移してバビロンに連れて行ったあとのこと」とありますが、それは、B.C.597 年のことでした。ですか

ら、ここでは時代が遡っていることがわかります。本来であれば、年代順で言えば、この25章は21章の前に来る内容ですが、それがどういうわけか、ここに納められているのです。

エレミヤは、その年に主が語られたことばをユダの民全体とエルサレムの全住民に語りました。その内容は3～7節にあることです。「3「ユダの王、アモンの子ヨシヤの第十三年から今日まで、この二十三年間、私に【主】のことばがあり、私はあなたがたに絶えず、しきりに語りかけたのに、あなたがたは聞かなかった。4 また、【主】はあなたがたに、主のしもべである預言者たちを早くからたびたび遣わされたのに、あなたがたは聞かず、聞こうと耳を傾けもしなかった。5 主は言われた。『さあ、それぞれ悪の道から、あなたがたの悪い行いから立ち返り、【主】があなたがたと先祖たちに与えた土地に、いつまでも、とこしえに住め。6 ほかの神々に従い、それに仕え、それを拝んではならない。あなたがたが手で造った物によって、わたしの怒りを引き起こしてはならない。そのようにすれば、わたしも、あなたがたにわざわいを下さない。7 しかし、あなたがたはわたしに聞き従わなかった——【主】のことば——。そして、あなたがたは手で造った物でわたしの怒りを引き起こし、身にわざわいを招いた。』」

ヨシヤ王の治世の第十三年とは、B.C.627年のことです。エレミヤはその年に預言者として召され、主が語られることばを語り続けてきました。その期間は23年間です。彼は23年間主がユダの民に語られることばを絶えず、しきりに語りかけたのに、彼ら聞きませんでした。それはどういう内容だったかということ、5節と6節にあるように、いたってシンプルなものでした。それは、それぞれ悪の道から立ち返り、主が彼らの先祖たちに与えた土地に、いつまでも、とこしえまでも住むように、というものでした。ほかの神々に従い、それに仕え、それを拝んではならない。ただ神を愛し、神のみことばに従って歩むようにという、実にシンプルなメッセージでした。

しかし、彼らはそのエレミヤが語る主のことばを聞きませんでした。彼が23年間もしきりに語りかけたのに、だれも彼の話に耳を傾けなかったのです。だれも彼の招きに応えようとしませんでした。エレミヤは23年間もしきりに主のことばを語ったのに収穫はゼロでした。だれも

彼のことに耳を傾けようとしなかったのです。それは、エレミヤにとってどれだけ忍耐を要することであったかと思います。いや、神にとってどれほど忍耐を要することだったでしょう。私は牧会を始めて 40 年になりますが、もしだれも神に立ち返らなかったら、だれも神を信じなかったらどうしただろうと考えると、おそらく牧師を辞めていたんじゃないかと思います。やっ
てられない・・と。それはそうでしょう。だれも聞いてくれない、だれも信じようとしな
いたら、いったい何のために語っているのかわからなくなってしまいます。や～めた！と、早々に
辞めていたと思いのです。でもエレミヤはそうではありませんでした。彼は 23 年間主のことば
をしきりに語りかけ、だれも聞かなくても神のことばを語り続けました。たとえ目に見える収穫
がなくても、たとえ目に見える成果がなくても、彼は語り続けたのです。しきりにかたりかけた
のに、彼らは聞きませんでした。それは実のところは神が語りかけておられたことでした。神が
エレミヤを通して語っておられたのです。だれもご自身に立ち返らなくても、神はずっと語り続
けてくださいました。ここに、神がどれほど忍耐深い方であられるか、どれほどあわれみに富
んでおられる方であるかがわかります。そして、そのようにして私たちがご自身の下に立ち返
るのを待っていてくださったということを思うと、感動で胸が熱くなります。こんな自分勝手
で罪深い者のために、神に立ち返るためにしきりに語りかけ、忍耐してずっと待っておられた
のですから。十字架を立てて。新聖歌 188 番に「救い主は待っておられる」という讚美歌があ
りますが、その歌詞にあるとおりです。救い主はずっと待っておられました。あなたが心の戸を
開くのを、ずっとずっと待っておられたのです。それこそ 23 年間どころじゃない、もっともっ
と長い間待っておられたのです。

神が私たちに願っておられることは、私たちが聞き従うことです。聞き従うことはいけにえ
にまさります。それなのに彼らは聞き従いませんでした。しきりに語りかけたのに、です。この
「聞かなかった」ということばに注目してください。ここには「聞かなかった」とか、「耳を傾けな
かった」ということばが繰り返して出てきます。それが強調されています。8 節にも「聞き従わ
なかった」ということばがあります。皆さん、イスラエルの歴史は、一言で言えば、神への反逆の
歴史です。あなたの歴史はどうでしょうか。あなたの生活はどうでしょうか。あなたの人生はど

うですか。しきりに神が語りかけているのに聞かないということはないでしょうか。いつも聖霊に逆らっている歴史、逆らっている毎日、逆らっている人生であるということはないでしょうか。

リビングライフというディボーションの月刊誌の中に、こんなエッセイがありました。これはキム・ウォンテという韓国の牧師が書いたものです。

サハラ砂漠の西側には「サハラの中心」と呼ばれる小さな町があり、多くの旅行客がこの町を訪問しようと砂漠を訪れます。しかし、レビンという人がこの町に来る前までは、その町は全く開放されていない立ち遅れた場所でした。町の人々は一度も砂漠を出たことがありませんでした。何もない砂漠から出ようと試みましたが、一度も成功できませんでした。レビンは町から抜け出せない理由を尋ねました。すると、返ってくる答えはすべて同じでした。「どこに向かって歩いても、出発した場所に戻って来てしまうのです。」

そこでそれが本当かを試すために、レビンは北に向かって歩きました。すると三日で砂漠を抜け出すことができました。では、なぜ町の人々は抜け出すことができなかったのでしょうか。次にレビンは町の青年を一人連れて、青年が行く方向について行きました。昼も夜も歩き、11日目には再び町に戻ってきました。ついに、レビンはその町の人々が砂漠を抜け出せない理由を見つけました。誰も北極星を知らなかったのです。レビンは前回の実験に参加した青年に、昼は十分休んで、夜になったら北極星の後についていくようにと言いました。その青年がレビンの言葉通りにすると、3日目で砂漠を抜け出すことができたのです。後日、青年は砂漠の開拓者となり、開拓地の中心には彼の銅像が立てられました。その銅像にはこのような文字が刻まれているそうです。「**新しい人生は、方向をしっかりと見つけた時に始まる！**」

皆さん、これは私たちの人生にも言えることではないでしょうか。新しい人生は、方向をしっかりと見つけた時に始まります。私たちの歴史は、イスラエルの民のように神への反逆の歴史です。神がしきりに語りかけているのに聞こうとしないで、神に逆らい続けています。でもそんな不従順な道から立ち返り、神のもとに帰れば、いつでも主は私たちをいやし、触れてくださり、もう一度神の子どもらしく歩めるように回復してくださいます。あなたに求められているこ

とは、主のみことばに聞き従うことです。主が遣わされた預言者たち、主の働き人たちの権威を認めて、彼らが伝えることばに耳を傾けて従うことなのです。新しい人生は、方向をしっかりと見つけた時に始まります。私たちはその方向を軌道修正し、神に立ち返り、神のことばに従って歩いていかなければなりません。そうすれば、あなたは神の取り扱いを受けることができ、神にしかできない御業があなたの内になされ、あなたは良いものに変えられるのです。初なるのいちじくのように、みずみずしく、魅力的で、本当に価値のある、美味しい実に作り変えられるのです。

Ⅱ. 70 年のバビロン捕囚(8-11)

次に、8～11 節をご覧ください。エレミヤが主のことばを絶えず、しきりに語りかけたのに、それを聞かなかったユダの民に対して、主はどうなさるでしょうか。9～11 節にこうあります。
「9 見よ、わたしは北のすべての種族を呼び寄せる——【主】のことば——。わたしのしもべ、バビロンの王ネブカドネツアルを呼び寄せて、この国とその住民、その周りのすべての国々を攻めさせ、これを聖絶して、恐怖のもと、嘲りの的、永遠の廃墟とする。10 わたしは彼らから楽しみの声と喜びの声、花婿の声と花嫁の声、ひき臼の音と、ともしびの光を消し去る。11 この地はすべて廃墟となり荒れ果てて、これらの国々はバビロンの王に七十年仕える。」

そうしたユダの民の不従順に対して、主はバビロンの王ネブカドネツアルを呼び寄せて、その国とその住民、その周りのすべての国々を攻めさせて、これを聖絶し、恐怖のもと、嘲りの的、永遠の廃墟とします。その結果、10 節にあるように、それまで日常で普通になされていた営みが、すべて消えてしまうことになります。楽しみの声と喜びの声、花婿の声と花嫁の声、ひき臼の音と、ともしびの光が消えてしまうことになるのです。ひき臼の音とは、結婚して料理を作る時、包丁でまな板を叩きますよね、その音です。それはまさに平和な暮らしのシンボルのような音ですが、その音が消えてしまうのです。現代風に言うならば、電子レンジの「チン」が聞こえなくなるということでしょうか。ご飯を温める時に 60 秒にセットして、出来上がったら「チン」と音がして「できた!」となるあの「チン」の音が聞こえなくなってしまうのです。あるいは、お湯

が沸いた時に鳴る「ピー、ピー、ピー」という音でしょうか、そういう台所の音が聞こえなくなってしまう。バビロンによってそうした平和な生活が破壊されてしまうからです。

また、ここには「ともしびの光を消し去る」とあります。これは部屋を明るく照らしていた電気が消えて暗くなってしまうということです。もうそこに住んでいる人はいなくなります。そこはすっかり廃屋となってしまうのです。それは、彼らが主のことばに聞き従わなかったから、聞き従わなかったからです。その結果、バビロンの王ネブカデネツアルによる 70 年に及ぶ支配に甘んじることになるのです。

ところで、ここにはバビロンの王ネブカデネツアルのことが、「わたしのしもべ」と呼ばれています。4 節にも「主のしもべである預言者たち」ということばが使われています。主の預言者であれば「主のしもべ」と言われても納得できますが、異教の王、しかもユダの民を虐殺するような悪辣で非道な者が神のしもべと呼ばれていることには少なからず抵抗を感じるかもしれません。いったいこれはどういうことでしょうか。確かにダニエル書 4 章を見ると、ネブカドネツアルはダニエルを通してダニエルが信じていた真の神を信じて回心します。そしてこの神をあがめ、賛美し、ほめたたえるようになります。そういう意味では、確かに彼は神のしもべであったと言えるでしょう。でもここで彼が「主のしもべ」と呼ばれているのはそういう意味ではなく、あくまでも神のさばきを実行する器として「主のしもべ」と呼ばれているのです。ということはどういうことかということ、主なる神の支配は、こうした異教の指導者にも及ぶということです。神は、こうした異教の指導者さえも用いてまでも、ご自身の民を懲らしめられるのです。それは彼らが主のことばに聞き従わなかったからです。神のみこころは 5 節にあるように、いつでも、とこしえに、彼らが約束の地に住むことだったのに、そんな神のみこころを踏みにじり、神のことばに聞き従わないことを選んだために、自らにわざわいを招いてしまったのです。その神の懲らしめ、神のさばきの道具の一つが、バビロンの王ネブカドネツアルだったのです。そういう意味で彼は「主のしもべ」と呼ばれているのです。

それはユダの民だけに言えることではありません。私たちにも言えることです。もし私たちが口先では、「神様愛します」「あなたをあがめます」と言いながら、心にたくさんの偶像を抱え、

神がしきりに警告を語りかけてもそれを全く無視して背信に背信を重ねるなら、神はご自身のしもべ、バビロンの王ネブカドネツアルを呼び寄せて、あなたを攻めさせ、これを聖絶して、恐怖のもと、嘲りの的、永遠の廃墟とします。神はありとあらゆるものを道具として、ご自身に背く神の民を懲らしめるのです。そういう意味では、今あなたが抱えている苦しみも、その結果であると言えるかもしれません。

でも、安心してください。あなたのその苦しみは、あなたが神に愛されているという証拠でもあるのですから。それは、あなたが神の子どもであることの証拠でもあるのです。そうでなかったら、懲らしめや訓練を与えることはなさいません。神はあなたを愛しておられるのでむちを加えられるのです。ヘブル 12:5～6 にこのように書いてあり通りです。「わが子よ、主の訓練を軽んじてはならない。主に叱られて気落ちしてはならない。主はその愛する者を訓練し、受け入れるすべての子に、むちを加えられるのだから。」

だから、悲観しないでください。だから、私はもうだめだと思わないでください。私にはもう希望がないと言わないでください。あなたが素直になって神のことばに聞き従うなら、あなたは神の御取り扱いを受け、義という平安の実を結ぶことになるからです。

Ⅲ. 70年の終わりに(12～14)

最後に、12～14 節をご覧ください。「12 七十年の終わりに、わたしはバビロンの王とその民を——【主】のことば——またカルデア人の地を、彼らの咎のゆえに罰し、これを永遠に荒れ果てた地とする。13 わたしは、この地の上にわたしが語ったすべてのことばを実現させる。それは、エレミヤが万国について預言したことで、この書に記されているすべての事柄である。14 多くの国々と大王たちは彼らを奴隷にして使い、わたしも彼らに、その行いに応じ、その手のわざに応じて報いる。」

ここに「70年の終わりに」とあります。バビロンは、イスラエルを懲らしめる器、道具として神に用いられますが、そのバビロンも 70 年の終わりに、彼らの咎のゆえに罰せられ、永遠に荒れ果ててしまうこととなります。一時は権勢を振るったバビロンも、創造主なる神のことば

に聞き従わなければ、さばかれることになるのです。そして主は、バビロンの次に、世界を治めたペルシャの王キュロスの霊を奮い立たせ、ユダの民をエルサレムへ帰還させる道を開かれます(エズラ 1:1-4)。主は、ユダの民ばかりでなく、すべての国民、すべての国を治めておられるお方なのです。

ところで、ここには「70 年の終わりに」とあります。ユダの民がバビロンで捕囚の生活を送るのは 70 年間であると預言されているのです。それは期間限定の捕囚、期間限定の懲らしめであったということです。この期間限定というのがいいですね。今は秋ですが、秋の期間限定のスイーツが販売されています。期間限定のマロンケーキとか、期間限定の紫芋フラパチーノとか、なんだかスイーツばかりですが、甘いものが大好きな私は、この期間限定のスイーツが大好きです。そしてここにも期間限定が登場します。ユダの民がバビロンに捕えられる期間です。それは 70 年と定められていました。それがいつまでなのかわからないと、忍耐のない私たちにはお先真っ暗となってしまいますが、主は本当に優しい方ですね。捕囚という悲劇が起こる前に、その期間をちゃんと定めておられました。70 年間です。これはユダの民にとってどんなに大きな希望だったのでしょうか。確かに 70 年という年月は途方もない年月ですが、それはいつまでも続くものではない、その先には回復がある、希望があるという約束は、彼らにとって大きな励ましとなったに違いありません。

ところで、皆さん、この 70 年という期間がどのようにして定められたかご存知ですか。ある人は、この「7」が完全数であり、「10」も完全数なので、これは神のさばきの完全さと徹底さを表している象徴的な数字だと考えていますが、そうではありません。これは、律法の書に予め定められていた期間でした。Ⅱ歴代誌 36:21 を開いてください。ここにはこうあります。「これは、エレミヤによって告げられた【主】のことばが成就して、この地が安息を取り戻すためであった。その荒廃の全期間が七十年を満たすまで、この地は安息を得た。」

イスラエルの民が約束の地に入ってから 490 年間ずっと破り続けてきた掟がありました。それがこの安息年の定めです。それはレビ記 25 章にあります。7 年ごとに農地を休ませなければならぬという規定です。それなのに彼らは、約束の地に入ってから 490 年の間、ずっ

とこれを破り続けてきました。それで神は 490 年を 7 年で割った年数、すなわち 70 年間でバビロン捕囚の期間として定められたのです。この規定を破ればどうなるかということ、この中で定めておられたわけです。ですからこれは人の思い付きでも、偶然その期間になったというのではなく、予め神が定めておられた期間だったのです。

でも、だれもこの 70 年間というエレミヤの預言を信じていませんでした。ただ捕囚の民としてバビロンに連れて来られたという悲惨な現実を呪うばかりでした。しかしそんな中でこのエレミヤの預言に目を留め、信じ、しっかりと待ち望んでいた人物がいました。誰ですか。ダニエルです。ダニエルは、第一次バビロン捕囚の時(B.C.605)にネブカドネツアル王によってバビロンに連れて行かれ、ずっとそこにいました。その後、バビロンはメド・ペルシャ帝国によって滅ぼされ、メド・ペルシャの時代になりますが、ダニエルはそこでもペルシャの王たちに仕えました。そのダニエルに、このエレミヤのことばが大きな影響を与えたのです。ダニエル書 9:2 にはこうあります。「すなわち、その治世の第一年に、私ダニエルは、預言者エレミヤにあった【主】のことばによって、エルサレムの荒廃の期間が満ちるまでの年数が七十年であることを、文書によって悟った。」

捕囚の民としてバビロンにいたダニエルはペルシャの王ダレイオスが、カルデア人の国の王となったその元年、預言者エレミヤにあった主のことばによって、エルサレムの荒廃の期間が 70 年であることを悟ったのです。それが、今私たちが今見ているエレミヤ書 25:11~12 のみことばです。彼は私たちが今見ている同じエレミヤ書の箇所を見ていたのです。そこで彼はその期間が 70 年であることを悟り、そのメッセージをしっかりと心に留めて、その期間をずっと待ち続けたのです。これは期間限定の懲らしめであるということ、国が滅亡したかなたに希望があるということ、回復があるということを感じたのです。だからダニエルはどんな迫害に遭っても堅く信仰に立ち続けることができたのです。たとえライオンの穴の中に投げ入れられてもへっちゃらでした。神のことばによってその先が見えていたからです。

これは私たちにも言えることです。私たちの人生にもいろいろな苦しみや困難があるでしょ

う。でもみことばによってそれがどういうことなのかを悟り、その先にあるものをしっかりと見るなら、そこにどんな苦難があってもそれを乗り越えることができます。パウロは、「今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。」(ローマ 8:18)と言っています。確かに、将来に希望を持っている人は、試練を乗り越えることができます。ダニエルがみことばによって今まさに自分がそこにいることを知り、奮い立ったように、私たちもみことばによって自分がいる場所を知り、それがどうということなのかを悟るなら、どんな境遇にあっても奮い立つことができます。

その代表的な聖句を見て終わりたいと思います。エレミヤ 29:10~14 です。「10 まことに、【主】はこう言われる。『バビロンに七十年が満ちるころ、わたしはあなたがたを顧み、あなたがたにいつくしみの約束を果たして、あなたがたをこの場所に帰らせる。11 わたし自身、あなたがたのために立てている計画をよく知っている——【主】のことば——。それはわざわざではなく平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。12 あなたがたがわたしに呼びかけ、来て、わたしに祈るなら、わたしはあなたがたに耳を傾ける。13 あなたがたがわたしを捜し求めるとき、心を尽くしてわたしを求めると、わたしを見つける。14 わたしはあなたがたに見出される——【主】のことば——。わたしは、あなたがたを元どおりにする。あなたがたを追い散らした先のあらゆる国々とあらゆる場所から、あなたがたを集める——【主】のことば——。わたしはあなたがたを、引いて行った先から元の場所へ帰らせる。』」

この 29:11 は非常に有名な箇所です。この聖句がどのような文脈で語られているのかというと、この 70 年の期間限定が満ちる時、彼らを約束の地に帰らせるという神のご計画がいかに将来と希望を与えるものなのかを伝えることの中で語られたことでした。それはわざわざではなく平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。あなたもこの神のご計画を知るなら、それがわざわざではなく平安を与える計画であり、あなたに将来と希望を与えるためのものであることを知ることかできるでしょう。

ですから、私たちも主のことばを読んで、主がいま何を考えておられるかを知り、すべてを主にゆだね、その約束がなるようにと祈り、心を尽くして主を求めようになります。そして、

たとえ試練の中にあっても神のことばは必ず成ると信じて、将来に希望を持つことができるのです。その人の信仰は、生きて働くからです。